

「問いの設定」の学び方：傾向性と課題 How to learn "Question Setting": Tendency and Issues

藤田里実（大阪経済大学）

Satomi Fujita (Osaka University of Economics)

キーワード 大学教育、初年次教育、問いの設定 / University Education, First-year Experience, Question Setting

1. はじめに

1.1. 大学における初年次教育の現在

近年、大学における初年次教育は一般化されている。その実施率は約97%となり、具体的内容としては、レポート・論文等の文章作法、プレゼンテーション・ディスカッション等の口頭発表の技法、学問や大学教育全般に対する動機づけ、論理的思考や問題発見・解決能力の向上、等が挙げられる¹⁾。

このように初年次教育が浸透した理由としては、大学のユニバーサル化²⁾や、大学－高校間の接続問題などが挙げられている。後者に関しては、例えば山田（2009）は高等教育と中等教育の接続性の問題点を日米で比較し、アメリカでは「アカデミック・スキル」（前述した日本における初年次教育の具体的内容と重複する）は初等・中等教育で育成すべきスキルとして導入されている一方、日本の中等教育では知識注入型の授業が多い点を指摘し、日本の中等教育と高等教育間には、学習スタイルや期待される成果の接続性があまり見られず、これを要因のひとつとして日本における初年次教育の急速な導入・一般化と多様化が進んだとしている。また原田他（2018）はそのような学習スタイルや期待される成果の大きな変容から、大学初年次生が強い戸惑いや困難を感じることを「大1 コンフュージョン」と命名し、授業履修や学習面に対して戸惑いや困難が相対的に高いことを調査から析出した。

これらを踏まえると、多様な学生が入学してくる近年の日本の大学においては、高校までの学習スタイルとの乖離を縮小し、期待される成果の内容を学生が理解し、適切なアウトプットを可能と

することを目的として、初年次教育を設定している。それにもかかわらず、学習面などに関して高い困難を示すことも指摘されている、といえる。

1.2. 初年次教育における「問いの設定」

初年次教育の具体的内容のなかでも、学生が特に高い困難を示すのが、何を調査・研究しアウトプットするのかを絞り込む「問いの設定」である。

「問いの設定」は、レポート・論文の書き方や問題発見・解決学習など、前述の初年次教育の具体的内容の多くに共通して必要な能力である。多くの学生はまずレポートを書く際に「問いの設定」にチャレンジすることが多いが、その段階で躓き、思いつくままに書き出してしまうがために途中で書けなくなり、書くことに対する苦手意識を醸成していくことが多い（渡辺、2010）。また縣他（2019）は学習支援センターに寄せられたレポートに関する学生の相談内容の分析から、「問いの設定」にかかわる内容はその半数以上を占めていると報告している。

一方で、「問いの設定」はその重要性も指摘されている。一般的に、創造的な活動における問題発見の段階は、最終的な成果やパフォーマンスを強く予測する（Getzels & Csikszentmihalyi, 1976）という。また中央教育審議会大学分科会でも「大学教育において、学問を通じて『問題設定－仮説設定－仮説検証－結果報告』を修得し、自ら考えることができる人材を育成することは、この大きな変化の時代に欠かせない³⁾と主張されている。

そもそも、「問いの設定」はどのように定義されているだろうか。「問い」に関しては、佐藤（2014）はその3つの含意を①「テーマ」つまり考察すべ

き対象の所在を指し示し、論ずる領域の広がり、光を当てるべき焦点を明らかにしたもの、②「問題意識」つまり自分の興味と社会的意義、そして①と②の掛け合わせでもある③「問題設定」つまりなにが「わからない」ことなのか、解くべき問題を現実的に設定すること、に弁別している。大きくて抽象的なままの関心や問題意識を、局面や領域を限定して、具体的で適切な「問い」に分解することの重要性も指摘している。また狩野(2022)は、「問い」は認識した課題を建設的に活かすために立てるものであり、科学の考え方は「問い」を立てることから始まるとし、科学の考え方の根本として新規性・批判的思考・他のアイデアや説明の方法がないか、の3つを挙げている。一方で安斎・塩瀬(2020)は「問い」を「人々が創造的対話を通して認識と関係性を編み直すための媒体」とし、問う側と問われる側を設定して、「質問」(問う側は答えを知らないが、問われる側は知っている)や、主に教員が児童生徒に対して行う「発問」(問う側は答えを知っているが、問われる側は知らない)との比較により「問い」の特徴を「問う側も問われる側も答えを知らない」ことだとしている。

以上をふまえると、「問い」の定義としては、考察すべき対象の明確化・自分の興味と社会的意義の共存・現実的な解答可能性・新規性などが要件として挙げられ得る。

よって以下、本稿では「問いの設定」を「設定者が答えを示すことを前提(解答可能性)として、あらかじめ答えの確定していない(新規性)、社会的意義を持つ問題を文章化する(明確化)こと」と定義⁴する。

では、以上のような「問いの設定」の難しさと重要性を踏まえて、主に大学、特に初年次学生を対象とした「問いの設定」の学び方はどのような傾向性があるのだろうか。本稿では、ユニバーサル段階の大学生を対象としていると考えられる2005年以降の、「問いの設定」の学び方について触れた著作・論文を分析する。その結果から「問いの設定」の学び方の現在地を示し、さらにそこ

から垣間見える今後の課題を析出する。

2. 「問いの設定」の学び方

2.1. スモールステップ

学生の身になってみれば、レポートやリサーチ・Project Based Learningなどの端緒で「問いを設定しなさい」と指示されても、まずは「何から手を付ければいいのかわからない」と戸惑うだろう。それを想定して、問いを設定するためのスモールステップを提示している本は多くある。

花井・若松(2014)は論文の書き方を学ぶことを目的とし、「問いの設定」にあたるステップとして①自分の関心と「時、場所、対象などを限定する単語」と「一般的な単語」との組み合わせによってエリア(論文で取り扱う範囲)を表現する(例:現代東南アジアの国際関係)、②エリアは手に負えるかを検討する(独自性があるか、資料の入手難易度、資料読解のための言語能力など)、③テーマをトピックへと絞り込む(エリアについて5W1Hの質問を問いかけ、その結果をカードに書き出す)、④(③と並行して)キーワードを抽出し、そこから資料にあたる、⑤「何を取り上げるのか」「その目的は何か」「どのように論じるのか」「それがどういう意味を持っているのか」といった「テーマとねらい」を文章化する、という手順を示している。

縣他(2019)は、論文作成のピアチュータリング場面における学生の多様な躓きに対応したサポートのためのガイドラインを構築することを目的とした論文で、問いを立てる段階の支援を①「問いとは何か」を理解する、②文献を読んで必要な情報を得る、③文献から得た知識を基に自分の関心から問いを生成する、④問いの適切性を評価する、⑤問いの形式を整える、の5フェイズにまとめている。

一方で宅間(2008)は高校生に探求学習を指導した経験をベースとして、論文を最終成果物とした研究の手順を①自分の関心に気づく(図書館の書架をめぐる・関心領域を言葉で表してみる)、②関心領域を絞る、③選択した3つ程度の領域につ

いて基本資料を探し仮読みする、④一つの関心領域に絞る、⑤基本資料を読み情報カードを作る、⑥基本知識のまとめ文を作る、⑦研究テーマの候補を挙げる、⑧研究テーマを吟味する、⑨研究テーマを決める、という手順を具体的事例とともに示している。

これらから読み取れることは、大きな手順としては「自分の関心」とそれに関連する「資料」の読解、という段階を経る必要性である。関心が先の場合と、資料読解が先の場合があるが、宅間(2008)は「問いの設定」に関連する手順の次の段階でさらに資料にあたる必要性に触れており、この2段階は行き来する必要性があると考えられる。

2.2. 具体的手法

手順を学んだ上で、再度学生の身になってみると「やることの手順はわかっても、具体的にどのような行動を起こせば自分の関心が掘り下げられるのか、そして資料はどこにありどうやって読めばいいのかかわからない」という新たな問題が出てくるだろう。それに対応するため、具体的手法を提示する本も多い。

木林(2019)は、問題設定に関する指導法を、考えを深めるための「発想の整理」と、リサーチ・クエスチョンを作るための「先行研究の精査」の2つに分類できるとしている。ここではこの分類に従い、それぞれの具体的手法について整理する。

2.2.1. 発想の整理のために

渡邊(2022)は、「イメージ図」作成を提案している。これは、1枚の広めの白紙の中央に課題を円で囲んで書き込み、課題から連想する事柄を次々と書き込むものである。関連する事柄は線で結ぶ。多くのアイディアを出した後、それぞれのアイディアや情報の因子をグループ化・関連付けする。これにより、前節の①課題のイメージを広げる、②テーマを絞り込む、の2ステップを実行に移すことができる。このような視覚化の手法をとるものは散見され、例えば石井(2011)は「思

考マップ」でトピックに関する関連事項を書き出し、反論・主張と例・原因・結果などの関係性を図示することを提案している。

上記のような視覚化はテーマや関心事に関するキーワードを多く出す仕掛けでもあるが、それにすら躓く学生も想定される。多くの視座を得ることを目的に、5W1Hも提示される(酒井、2009: 刈谷・石澤、2019など)。またブレインストーミング(北尾他、2005)、KJ法(慶応義塾大学日吉キャンパス学修相談員、2014)、ビリヤード法(戸田山、2002)などの思考ツールの活用も提案されている。

2.2.2. 先行研究の精査のために

先行研究精査のためには、「問いの設定」とは別に、論文などの資料を検索し、その適切性を判断する能力、論文など論理的な文章を読解する能力、読解した内容を記録し整理する能力、自分の成果物に適用するために要約する能力など、多くのスキルが必要となる。

そのため、例えば山田・林(2011)のように別章を立てて(3章「情報収集力」、4章「情報整理力」、5章「読む力」)詳説するものが多い。ここでの傾向性としては、「速読」(花井・若松、2014)、論文の場合は「要約」と「先行研究」から読むべきこと(小熊、2022)、など資料の要点をつかむためのいわば斜め読みの方法や、クリティカルリーディングを紹介する傾向がみられる。高校までの国語の授業などでは詳細な読解やテキストに従った読解が求められるものであったことを踏まえ、目的に応じた読み方の多様性を提示する、高校までの学習スタイルとの乖離の縮小の一例といえる。

また山田・林(2011)や小熊(2022)などは、先行研究に触れる端緒の行動として、「教員に相談する」ことを挙げている。先行研究を探索するための身近で検索しやすいデータベースとして、教員という資源の存在を知ることが、学生にとって有益であろう。

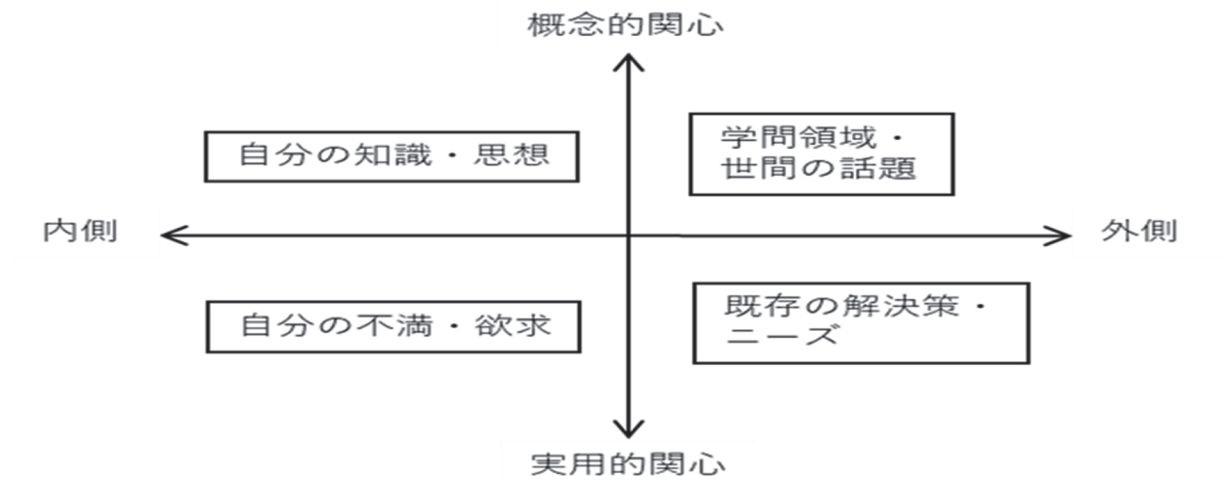


図1 安齋・小田（2021）による「問いの探索のマトリクス」

3. 考察

ここまで探索してきた傾向性をまとめるうえで、安齋・小田（2021）の「問いの探索のマトリクス」（p.101）は示唆に富んでいる。安齋らはリサーチ⁵の「問い」を探索するため、自分、つまり問いの設定者の「内側」と「外側」「概念的関心」と「実用的関心」の2軸で4象限を提示する（図1）。左上の象限は、今の自分自身が保有している知識や理論、関心などが含まれる。左下の象限は、日々の生活の中で抱えている欲求や不満、ニーズを表し、具体的な場面における困りごとなどが含まれる。右上の象限は、現代の人類全体にとっての興味、社会に蓄積されている知識を指す。右下の象

限は、現代の人類の関心やニーズを表している。

このマトリクス上に、ここまで見てきた「問いの設定」の学び方を重ね合わせると、図2のようになる。手順の傾向としては、自分の内側の象限から始めて自分の関心に気づき、自分の外側の象限にあたる先行研究の精査へと進んでいく。具体的手法としては、自分の関心（発想）整理のためにはマップによる視覚化・5W1H・KJ法などがある。また先行研究の精査のためには、クリティカルリーディング、つまりテキストと自分の関心を重ね合わせ、分析・検討しながら読むという象限を行き来する作業が必要となる。

安齋・小田（2021）は「どこか1つの象限を起

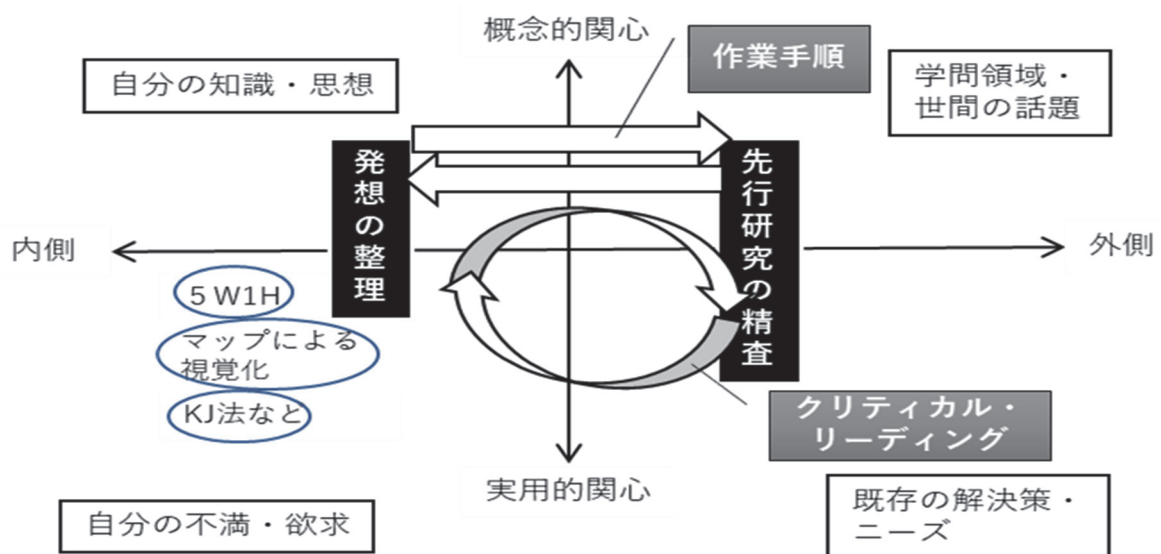


図2 「問いの探索のマトリクス」と「問いの設定」の学び方
（安齋・小田（2021）を一部改変）

点としながら、複数の象限と行ったり来たりしながら問いを立てる」ことを推奨していることとも重なり、現在の「問いの立て方」の学び方は、設定者の「内側」と「外側」の往還を重視しているといえる。「概念的関心」と「実用的関心」の峻別はこの分析では明確でないが、例えばレポート・論文作成においては概念的な、Project Based Learning や探求的な学習などにおいては実用的な関心に基づくことが考えられる。

4. 課題

4.1. 一人で考えるか複数で考えるか

「問いの設定」でも頻出する5W1Hに則って本稿を振り返ると、手順では「何を・どの順番で」学ぶかを整理し、「どのように」それぞれの段階で作業を進めるかという手法を整理した。「誰」の文脈で考えると、誰「と」という部分では課題も想定される。

特に最終成果物としてレポート・論文を想定している場合、アウトラインや推敲時には教員や友人に読んでもらうことを推奨するものもある（花井・若松、2014；渡邊、2022など）が、基本的に「問いの設定」は一人で行うことが前提となっている。だが安斎・塩瀬（2020）などのように調査研究を主眼とする場合、むしろチーム（複数人）での検討が前提となっている。

成果物が個人のものであるレポート・論文を作成するためではあるが、アメリカなどでは執筆グループを作り、各々の研究状況を定期的に議論するシステムもある（ブース他、2018）。このようなグループ内では、自分の内部で起こる「内側」と「外側」の往還のみならず、他者の「内側」と「外側」の往還の在り様を理解すること、また他者に理解されるよう自分の往還を説明することによって、新たなアイデアがメンバー個々に生まれる可能性があるのではないだろうか。

4.2. 言葉の未定義

レポート・論文の書き方を主眼とする場合、「問いの設定」にかかわる言葉の定義がなされていない。

例えば石井（2011）は「トピック」＝「話題」、「キーワード」＝「トピックに関係する単語」、「テーマ」＝「キーワードを『意義のある質問』として提示したもの」とそれぞれ提示している。つまり「トピック」から「キーワード」を抽出し、そこから「テーマ」を探していくことになる。また、渡邊（2022）は「課題」をイメージ図によって「キーワード」に分割し、「テーマ」へと絞り込んでいくとしている。一方で、西川他（2017）では与えられた「テーマ」に関する資料を集め、「トピック」を絞り、問いを立てるとしている。つまり、「テーマ」「トピック」の大小関係も多様となっているのが現状である。

小熊（2022）はこれに関し、日本語の「主題」を英語でどう表現するかは定まっていないことを指摘している。アメリカの社会科学では、テーマ theme は抽象的で包括的な概念と考えられているためかあまり使われず、Research question が多用され、具体的な論題としてはトピック topic が使われるとしている。

このような日本の現状を踏まえ、学生の指導の際には初学者の混乱を避けるためにも、明確な定義が必要となる。

5. おわりに

本稿では、主に大学、特に初年次学生を対象とした「問いの設定」の学び方はどのような傾向性があるのかという問いをもって、ユニバーサル段階の大学生を対象としていると考えられる2005年以降の、「問いの設定」の学び方について触れた著作・論文を分析した。その結果、現在の「問いの立て方」の学び方は、問いの設定者の「内側」と「外側」の往還を重視していることを析出した。

このような「問いの立て方」を学ぶことは、大学改革の視点からも注目しうる。広田（2019）は、近年の大学教育改革について考える視点として、大学における「教える—学ぶ」関係の変容を整理している。かつては「自律的学習者モデル」、つまり知的な意欲を持った学習者が学問共同体の中に周辺から徐々に参加していくという認識のもと学

生を受け入れていたが、ユニバーサル化により立ち行かなくなった。そして現在進行中の大学改革によって「教育プログラム・モデル」、つまり教える側が、何をどう教え、どう学ばせるのかをあらかじめパッケージのように体系化・組織化しておき、密度の濃い、隙間のない教育空間を作り上げようとするやり方によって現状を分析し、これを「学校化」「学習から教育へ」として批判の対象としている。そこで対案として「自律的学習者(たち)へと成長させる場」としての大学、つまり入学時には受動的で選択能力の乏しい存在だった学生たちを、在学中に能動的で自己選択によって学習し続けられる存在に変えていくという大学の在り方を打ち出している。その場合のカリキュラムは、知識ベースの体系性だけでなく、自立した学習への動機づけやその学習が可能になるためのスキルの獲得も組織される必要があるという。

まさにそのような「自律的学習者(たち)へと成長させる場」としての大学では、「問いの立て方」は必須の項目となるだろう。宮野(2021)が示すように「問い」は考えることそのものであり、「問い」つまり「考え」がなければ自分というものもない。学び続け考え続ける基本スキルとして、今後もその学び方を洗練させていく重要性は高まる。

なお、本稿では縣他(2019)がふれているような「問いの評価」(問いの適切性を確認する段階)に触れることができなかった。これは「学び方」と題し、学生の活動を主体として考察をしてきたことにもよる。適切性の確認は学生個々あるいは学生間では判断が難しい。稿を別にし、初学者にも判断をつけることのできるチェックリスト作成の可能性などを探りたい。

註

¹ 文部科学省(2020)「大学における教育内容等の改革状況について(令和2年度)」

https://www.mext.go.jp/content/20221122-mxt_daigakuc03-000025974_1.pdf (2022年12月28日)

² 文部科学省(2022)「学校統計要覧」によれば、2009年には4年制大学への進学率は50%を超え、2022年は56.6%となっている。

³ 中央教育審議会(2011)「中央教育審議会大学分科会のこれまでの主な論点について」

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shinngi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/09/30/1311557.pdf (2023年1月6日)

⁴ レポート・論文の書き方を主眼とした著作によくみられる「目標規定文」(渡邊2022、石井2011など)は、このように定義した「問い」に加え、「答え」(主張)と「方法」(論証手法)が含みこまれたものといえるが、本稿では探索的に答えにたどり着く手法や Project Based Learning などへの援用可能性も考慮し、このような定義とする。

⁵ 安斎・小田(2021)におけるリサーチは、『問い』を起点に、『データ』を手がかりとしながら、企業にとって『事業の新たな可能性を探り出す』ための、汎用的な思考法(p.7)と定義されている。

参考文献

- 縣拓充・玉田優花子・木村真理子・相原貴次(2019)「レポートライティングにおける『問いを立てること』の支援方法の検討」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』5, 121-134.
- 安斎勇樹・小田裕和(2021)『リサーチ・ドリブン・イノベーション 「問い」を起点にアイデアを探索する』翔泳社.
- 安斎勇樹・塩瀬隆之(2020)『問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション』学芸出版社.
- Booth, W C., Colomb, G G., Williams, J M., Bizup, J., & Fitzgerald, W (2016). *The Craft of Research Forth edition*, Chicago, Illinois, The university of Chicago Press. W・C・ブース, G・G・コロンプ, J・M・ウィリアムズ, J・ビズアップ, W・T・フィッツジェラルド 川又政治訳(2018)『リサーチの技法』ソシム.
- 中央教育審議会(2008)『大学分科会制度・教育部会「学士課程教育の構築に向けて」(審議のま

- とめ)』
 (https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf) (2023年1月6日)
- Getzels, J. W., & Csikszentmihalyi, M. (1976)
The Creative Vision: A Longitudinal Study of Problem Finding in Art. NY: John Wiley & Sons.
- 花井等・若松篤 (2014)『論文の書き方マニュアル [新版]ステップ式リサーチ戦略のすすめ』有斐閣.
- 原田新・谷航介・松井めぐみ・望月直人 (2018)
 『大1コンフュージョン』の実際 (第1報)
 ―高校と大学のギャップに戸惑う新入生の実態調査―『岡山大学教師教育開発センター紀要』8別冊, 97-107.
- 広田照幸 (2019)『大学論を組み替える』名古屋大学出版会.
- 石井一成 (2011)『ゼロからわかる 大学生のためのレポート・論文の書き方』ナツメ社.
- 狩野光伸 (2022)『SDGsの時代に探求・研究を進めるガイドブック 社会から始まり社会にめぐる、科学の考え方』培風館.
- 刈谷剛彦・石澤麻子 (2019)『教え学ぶ技術 問いをいかに編集するのか』筑摩書房.
- 慶応義塾大学日吉キャンパス学修相談員 (2014)
 『アカデミック・スキルズ 学生による学生のためのダメレポート脱出法』慶應義塾大学出版会.
- 木林理恵 (2019)「レポート・論文等における問いの立て方と『質問づくり』の手法」『日本語教育方法研究会誌』26(1), 76-77.
- 北尾謙治・実松克義・石川有香・早坂慶子・西納春雄・浅尾幸次郎・石川慎一郎・鳥谷浩・野澤和典・北尾 S.キャスリーン (2005)『広げる知の世界 大学出のまなびのレッスン』ひつじ書房.
- 宮野公樹 (2021)『問いの立て方』筑摩書房.
- 宮武里衣 (2022)『大学生のための日本語リテラシーとレポートライティング 初年次ゼミ対応テキストブック』ナカニシヤ出版.
- 中村かおり (2022)「レポート・ライティングにおける問題設定に対する指導法―ID理論による授業デザインの実践と効果―」『拓殖大学語学研究』146, 213-237.
- 西川真理子・橋本信子・山下香・石黒太・藤田里実 (2017)『アカデミック・ライティングの基礎―資料を活用して論理的な文章を書く―』晃洋書房.
- 小熊英二 (2022)『基礎からわかる 論文の書方』講談社.
- 酒井浩二 (2009)『論理性を鍛えるレポートの書き方』ナカニシヤ出版.
- 佐藤健二 (2014)『現代社会学ライブラリー18 論文の書き方』弘文堂.
- 鈴木宏昭・杉谷祐美子 (2012)「レポートライティングにおける問題設定支援」『教育心理学年報』51, 154-166.
- 宅間紘一 (2008)『はじめての論文作成術 問うことは生きること』日中出版.
- 戸田山和久 (2002)『論文の教室―レポートから卒論まで』日本放送出版協会.
- 都筑学 (2016)『大学1年生のための伝わるレポートの書き方』有斐閣.
- 渡邊淳子 (2022)『大学生のための論文・レポートの論理的な書き方』研究社.
- 渡辺哲司 (2010)『「書くのが苦手」をみきわめる―大学新入生の文章表現力向上を目指して―』学術出版会.
- 山田礼子 (2009)「大学における初年次教育の展開―アメリカと日本―」『クオリティ・エデュケーション』2, 157-174.
- 山田剛史・林創 (2011)『大学生のためのリテラシー入門―研究のための8つの力―』ミネルヴァ書房.